



ああ、今からでも 『台画伯』を目指したい

室井 滋

私の描く絵は怖ろしく下手クソだ。子供の頃からホントに苦手だった。

特にポスターのような、作品自体の目的を明確にするべき絵がひどかった。

真っ直ぐ線を引いたり、きれいな円を描いたり、遠近感を持たせたり、はみ出さずに色を塗り斑なく仕上げるのがまるで出来ない。愛鳥週間用ポスターのつばめは級友にカラスとしか見てもらえなかったし、交通安全週間のポスターには、「この横断歩道、グジャグジャ。かえって事故りそうやっちゃー」と家族から酷評を受けたものだった。

しかし、そんな私にある時ちよつとした「事件」が起こる。それは、中学二年生の写生大会のことだった。

朝から海辺の神社にお弁当を持って出掛け、夕暮れまでに絵を描き上げ提出するというキマリになっていたのだが……。それは、私にとって中途半端な遠

足のようなものだった。

私はそもそも写生なんてどうでもよかったので、一番仲の良い女の子の後を金魚の糞のようにして付いて回り、場所が決まれば決まったで、肝心の手よりも口を動かしてペチャクチャと、お喋りに花を咲かせていた。

午後になって初めて友達との差に気がつき、真っ白な画用紙をどう埋めたものかと焦り始める。何せ、下手な上に筆も遅いので、画用紙自体が自分には大き過ぎな物だった。

私はまだ手つかずの海と空の部分眺めて、「う〜ん」と唸り声をあげた。

と、その時だ。弾みで左手の指先が白地に触れてしまった。

「ゲゲツ、テトラポッドのねずみ色が、海ん所にくっついてしもうたちや」

慌てて絵筆を投げ捨て、右手でその部分を拭おうとゴシゴシ擦る。

すると今度は草木に使った黄緑色がついてしまうではないか!? ダラダラ遊んでいる間に指先が絵の具だらけだった。

私は自分の拙い筆さばきでこの失敗を処理できると思えず、頭の中が真っ白になってしまった。

波打ち際のカモメが騒ぎ始める。

夕暮れの時間がどんどん迫っていた。

咄嗟の思いつきで、私はパレットの上に、青色や緑色やぐんじょう色、黄緑

室井 滋(むろいしげる) ●富山県生まれ。女優。早稲田大学在学中から自主制作映画に出演し、1981年、『風の歌を聴け』で劇場映画デビュー。その後、『居酒屋ゆうれい』『のど自慢』『OUT』『ヴィヨンの妻〜桜桃とタンポポ〜』などで数多くの映画賞を受賞。最新映画は『ねこタクシー』。ドラマでも精力的に活躍。著書も多数。近著に小誌連載エッセイをまとめた『すっぴん魂 大全 紅饅頭／白饅頭』やコミック『東京バカッ花 上巻／下巻』など。



白色、水色などの絵の具を大量に絞り出した。そして、左右の指先にそれらをつけると、ペタペタと画用紙に押し付け、白波の立った富山の海を描いてみたのだ。「ああこれ、いいかも。指紋がいっぱいなのが小波に見える。キラキラ光を受けると、波ってひと色やないんやねえ」

もう夢中で指スタンプを押した。

白い部分をほとんど海にして行く内に、私は生まれて初めて、絵って楽しいと思つた。叩いたり撫でたり、紙と絵の具と自分が一体になるような感覚を味わつたものなのだ。

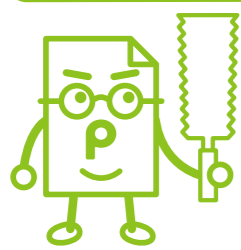
しかも、この絵には想像もしない御褒美がついた。何と私の『空と海とテトラポッド』が金賞に選ばれたのである。

絵は嫌いと思つてかかっていた私の心はこの日を境に、ちよつぱり変わった。「へへへ、ポスターはパスするけど、写真なららせて。私には秘密の手法があるがいちや〜」

元氣いっぱい胸を張り、指を鳴らして画用紙に向かうようになったのであります。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることで育つ森がある。
木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまうんです。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>

◆次回は9月30日号、タケカワユキヒデさんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake